

協力部医療協力第2課長代理)、阿部貴美子(国際開発センター)の5名であった。

本調査団の目的は、1997年7月1日～2000年6月30日の3ヶ年の協力期間で進行中の本プロジェクトの終了時評価を行うことであった。本プロジェクトの終了までなお8ヶ月を残すこの時期に終了時評価調査団を派遣した理由は、JICAとヨルダン国の間で、本プロジェクトの2年延長の話がもち上がり、延長の可否を判断するためには、早めに調査団を送る必要があったためである。

調査団は、首都アンマンの日本大使館、JICA事務所、ヨルダン側の国家人口審議会、計画省、保健省、人間開発基金(JOHUD)を訪問し、各組織の幹部から本プロジェクトについての評価を聴取、プロジェクトサイトのカラク県南ゴール郡の各プロジェクト施設、住民を訪問・視察した後、日本側の長期・短期の専門家ならびにヨルダン側のカウンターパートの全員からプロジェクトの分野別進行状況を聴取した。最終的には、本調査団とヨルダン側の各組織の幹部との協議を経て、双方が合意する討議録(ミニッツ)を作成し調印した。本ミニッツにおいては、本プロジェクトについて、運営面で若干の問題点はあるものの、1994年のカイロ会議で行われたリプロダクティブ・ヘルスの普及と女性の地位向上(WID)を結びつけるユニークなプロジェクトの意義、これまでの活動内容(女性・男性の啓蒙活動、医療・保健協力、女性の収入創出活動など)、これまでに達成された成果を高く評価した。

JICAは現在、本調査団の報告を受けて、本プロジェクトの2年延長、ならびにパイロット地区からカラク県全域へのプロジェクトの拡大について検討中である。(阿藤 誠記)

サンプル調査無回答に関する国際会議

1999年10月28～31日に米国オレゴン州ポートランド市のポートランド・ヒルトン・ホテルを会場としてサンプル調査無回答に関する国際会議(International Conference on Survey Nonresponse)が開催された。この会議は米国統計学会(ASA)が事務局となり、米国世論調査協会(AAPOR)、米国統計学会サンプル調査方法論部会(ASA-SRMS)、米国サンプル調査協議会(CASRO)、市場・世論調査協議会(CMOR)、国際サンプル調査統計協会(IASS)が主催し、米国政府のセンサス局、法務統計局、労働統計局、全国農業統計部とニールセン・メディア調査会社が後援し、さらにオーストラリア統計局と若干の米国政府機関、民間調査機関が協賛した。この会議は特定の学会の年次大会ではないため、定期的に開かれているものではないが、前述の共催機関等により実施され、招待報告の論文集がWiley社から出版されているサンプル調査に関する一連の国際会議の一つであった。直前の会議は1996年に米国テキサス州サンアントニオ市で開催されたコンピュータ補助サンプル調査情報収集に関する国際会議で、その招待論文集は1998年に刊行されている。

会議は午前2コマと午後2コマずつ初日の午前から最終日の午前まで開催され、1つのコマで社会科学系(社会調査・世論調査)のものと統計学系(数量的方法論)のものに区分される最大6つのセッションが同時開催され、77のセッションで合計200以上の報告がなされるという中身の濃いものであった。形式としては基調講演のようなもの、シンポジウムのようなもの、類似テーマの自由報告が併存するものの3種類があった。参加者は同じホテルに宿泊し、朝食と昼食を同じ会場内で取るため、自然に参加者同士が知り合うことになった。共催者の構成からも推測される通り、数の上では社会科学系のセッションの方が多く、大きな会場を用いる場合が多かったため、参加者も前者の方が多かったものと推測されるが、日本からの参加者は後者の方が多かった。

参加者は約500人で、米国からの参加者が半数以上を占め、カナダからの参加も比較的多かったが、ヨーロッパではイギリス、ドイツ、オランダ、スウェーデン、フィンランドからの参加が目についた。日本からは筑波大学社会学系(社会学系)の金澤雄一郎助教授と同大学院の李相吉氏、早稲田大学政治経済学部

の西郷浩教授（カナダのフレーザー・サイモン大学で在外研究中）、京都大学工学部の藤井サトシ教授の各氏も参加された。プログラムには日本からの参加者による報告が2本記載されていたが1本がキャンセルされたため、実際に報告されたのは筆者による "Determinants of Underreporting of Induced Abortions in Japan" (Session 56: National Experiences on Nonresponse) と題された自由報告のみであった。また、オレゴン大学大学院に留学中の村田トシヒコ氏も指導教授の Patricia A. GWARTNEY 教授とともに "Question Saliency, Question Difficulty and Item Nonresponse in Survey Research" (Session 74) と題された基調講演型報告をされた。

なお、無回答・欠測値（欠損値）を含む不完全データに関する国際会議はヨーロッパを中心に2年に1回程度開催されているが、2000年7月にはドイツのミュンヘン大学で開催されることになっており、筆者も参加する予定である。わが国の学界ではサンプル調査に関する統計的方法論への関心があまり高くないためか、日本統計学会や日本世論調査協会の大会でもそのようなセッションや報告が少なく、筆者のように内外の人口学的サンプル調査を分析しながら常に問題を感じている者としては残念ながら、外国の学会等で最新の研究動向を勉強せざるを得ない。わが国でもより多くのサンプル調査データが公開されるようになり、統計的方法論への関心が高まり、国内でも勉強できるようになることを祈る次第である。

（小島 宏記）

ベトナムエイズ・性感染症予防調査

ベトナム南部エイズ・性感染症予防調査プロジェクトを開始するため1999年8月より11月までベトナムに出張した。これはベトナム保健省、ハワイ大学、タイ赤十字社と共同の国際プロジェクトである。この研究の目的は、異性間性行為による HIV-1 感染が急速に増加しているカンボジア国境沿いの An Giang 省と Kien Giang 省において HIV-1 感染及び性感染症と行動の疫学状況や原因を明らかにすることであり、さらに予防とその評価まで視野に入れている。

今回は疫学的・行動学的データ収集のサンプリング枠を策定するための買売春の地理的・社会的マッピング手法に関する国際ワークショップにまず参加した。その後、9月27日までハノイの保健省及び National Institute of Hygiene and Epidemiology (NIHE) に滞在し、UNAIDS や UNFPA などの国際機関、National Institute of Sociology などの国立機関、さらに Family Health International などの NGO から最新の情報を得る一方、研究計画の説明を行なった。また、Ministry of Planning and Investment の許可を得た。以降はおもに An Giang 省予防医学センター (An Giang Preventive Medicine Center) に滞在しプロジェクトの立ち上げを行なった。10月6日には An Giang 省と Kien Giang 省の保健局長、また、それぞれの省から警察、市や郡の保健局などの代表、さらには NIHE の代表やホーチミン・パスツール研究所長などの参加を得てワークショップを開催し、HIV の疫学状況や本プロジェクトの説明を行ないフィードバックを得た。さらに、11月1日から6日にはマッピング・ワークショップを、11月23日から26日には面接調査ワークショップを行ない An Giang 省と Kien Giang 省のフィールドワーカーとスーパーバイザーの訓練を行った。現在マッピングが終了し、面接調査が行われている。（小松隆一記）